經典餘師

論語

190
3
一

特36
515

008466-001-8

特36-515

経典余師四書

渓　百年／著

M17
AAC-0986

論語朱熹集註

學而第一

子曰ハく学て而して時に之を習ふ亦説び不亦乎

朋有遠方自來る亦樂まず不人乎

人知不而して恤ぶ不亦君子なる不人乎

論語朱熹集註　一之巻

學而第一

本文ニ学而の二字あるを以て篇の名とす以下もおの例なり

子曰學而時習之不亦説乎

子曰ハくべて聖人の御語なり以下此例と考るべし　そも学問の道更ニあらざる事なたくバ鳥の始て飛なるふ如く少しの間のかよハきも後くハ海山をも飛こもべし習の字ニハ心の上ニ時といふも時々のとまてハなく二六時中平生のくなり時ニ習とハ常ニ学びさるとくを幾たびも味ひへバいつくなく学問の訳も意得して心中の説び多くるべしとなり○おのゝ善を勸むるのゝ示ハあゝぞ凡てこゝろの置どころハ善場ニも悪き場ニも常によりそふとの多くるべし染ものニして善ニもむかうかゝて徳自然と生ニうるゝやうニ見ゆるものゝ誠ニそうゝきとなるべしや

有朋自遠方來不亦樂乎

凡て善ニも悪にも類を以て聚まるとなるバ朋友たゞひニ徳を考ひて相あつまるとハ誠ニ位高たのしきなるべや遠方より朋きたるとあるバ近きところハ勿論なるべしとゝ

人不知而不慍不亦君子乎

考るに段々学問ぎわくして胸中徳をたく

有子曰く其人と爲孝弟にして上を犯さんと好む者は鮮し上を犯さんと好まずして亂を作んと好む者未ざ之有ず而助字未二度よむなり

君子は本を務む本立て而して道生孝弟者其仁を爲の本與

子の曰はく巧言令色は鮮し仁

曾子の曰く吾日に三省

吾身を省みる人の爲に謀て忠ならざるか朋友と交て信なるか不乎傳て習ざるか乎

子曰まはく千乘之國を道るに事を敬して信なり用を節にして人を愛む民を使ふ時を以てせ

子曰まはく弟子入ては則は孝なり出ては則は弟なり謹んで信なり汎く衆を愛して仁に親く行餘力有

積に至るをば君子と名づく然に人其德を知不或は人に善をほめ誉も却て信じ用られざるもあるべし然といへども心に怨むる心なく段々くるは誠に君子といふのならん此は德の高く学問の深に入る兆しなりとぞ

○有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也

御弟子有子の曰ふ人は其父に孝を行ひ兄に弟

き爲人なるべし必て上に逆る人に高ぶりなく或は悪さげなる犯干の心の好りのは鮮矣まして上に逆る人に犯ぬ者の人なるべし乱なる挙動を作と心に好りのはむし

未に之有未きをと

君子務本本立而道生孝弟也者其爲仁之本與

仁とは本心の德なり德を成すは本を務むこなるべし本明らかに立ては道理の全体おのづから生ずべきなり故に君子は本を務る者は君に忠なり兄に弟きりのは年長の人に恭敬しきなり人を愛するのは人に愛せらるべし孝弟の道は本心の德を爲の本なりと

○子曰巧言令色鮮矣仁

言を巧にてたらひ笑ひ色を令くる顔色を令くる類の人は物を仁めぐむの心けつして鮮りのなりとの仰なり鮮矣とは聖人實裕の御詞にして實になれりのなりとの意とぞ

○曾子曰

吾日に三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎

曾子は聖人の御跡を継ぎ第一の御門人なり吾身に慎まざるやと省見なるべし仰らるふは吾まいふちはの三の品を以てもいはりては忠といふものにあるべし二には朋友に交るは信として言のたがはざるを重とし三には師より傳けらる道は習へと考てその意を發明するなり

○子曰道千乘之國敬事而信節用而愛人使民以時

國を治るの法を説ふ異邦の法凡そ百里四方の國は軍役車千乘を出すべし國をおさめ道びくの法は三ケ条を要とし敬事とは妄に法度を定むべうべし信とは法令一度び出ては違ふなきをいふ節用とは國の入用公務の弊その節に叶ざると犯は民の敗宝をそこなひて叶べうべし去ども下々なるべし困窮に至る以時とは民を使にその家業のさはりなきを要とし春は耕し夏は草ざり秋は實のりを收むるは冬の時は民の閑暇なるこの時に池ぶちん等の公役あるべし

○子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文

子弟なる者家に入ては父母に孝なるべし外に出ては年老の人に弟くあるべし言は謹でまくなく信はたがへざるやう

バ則ハち以て文を学ぶ

子夏曰く賢を賢として色に易父母ニ事て能其力を竭し君ニ事て能其身を致し朋友と交て言て而して信有バ未学ト曰ヘ雖ども吾必ず之を学と謂ん

(矣)助字 (未)二度よむ

子曰まハく君子重からず不バ則ハち威なし不学則ハち固なし

忠信を主とせ

汎く衆人ニ愛セよ仁ある人ニ親しく近ぢかくべし

餘力の日もちゐバ聖賢の文をも讀まふ事なり子弟たるもの心得なるべし

○子夏曰。賢賢易色。事父母。能竭其力。事君。能致其身。與朋友交。言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣

御門人子夏の曰らく人ハ凡そ人德を好ニ紛ぎハく色を好ニ心を用るふ俗説のごとくいふ貧く世ニ遊ぶ人も思の外なるを人ハ賢とハ德ある人を賢なりとてたふとむなり父母ニ事てハ力を孝行ニ竭べし君ニ事てハ身命をゆゑ致すあるべし事ニ臨て生を惜まず朋友の道ハ言をたがへず信あるを要とす。たとへ学問なしと言ふ人ありてもかくのごとく身を脩ずバ道を学ぶ人と吾ハいふべし

○子曰。君子不重則不威學則不固

君子とハ元位ありて上ニ立人をいふ故ニ又德ある人をもいふ人ハ重ずたゆとむずゆへの名なり以下もこの例なり君子ハ身を重くすべきなり高ぶるとにハあらず百斤の磐石の如し二斤の輕きものハ人これをなれどりてあそぶ人も又磐石の如く立居ふるまひ輕うすべ語ぶるよく謹むべきの時ハ人ふるまふ威ふくまるなり重ずれを重威の道といふ重うすべ威なるものハ学といふ固なり

主忠信。忠ハ誠のあつきなり信ハ事をたがへざるなり誠を

已に如不者を友とせること無

過てバ則ハち改むるに憚ること勿

曾子の曰く終を慎み遠を追民の德厚ニ帰せ

子禽子貢ニ問て曰く夫子是邦ニ至る必ず其政ばとを聞之を求むる乎抑之を與る乎

(於)助字

子貢曰く夫子温良恭儉讓以て之を得たり

心の主となるべしとふものハ感じて移りやすきものなり

家ニ主なるものハ人あるべきゆへ忠信を心の主とすべし

○無友不如己者

君子ハ重威を守て忠信を主とし過まちを改めて憚ること勿

德おのれニ不如ものハ常ニ友となりても益なし

必ず阻とふざるることゆへ忠信を心の主とすべし

○過則勿憚改

忘れバ失といひおりひよりぬを過とし智有も智無人も大小過ハあるべきなり過て知ればハ忽ニあらむるこれを智とやいふ愚なる者ハ心得たがへて改むるハたのうきのまくハ今あらざめくりとも遲きまくのと改むるとさバいろく憚あるとなりいよく愚者の域ニいる

○曾子曰。慎終追遠。民德歸厚矣

終とハ今の世の忌服のことなり遠とハ七回忌十三回忌乃至十七年二十五年などをいふ慎とハ暮中ニ哀の礼を尽すべきをいふ追とハ父母在世の時を追思ふ誠の心を尽すべきをいふ上ニ立人うやうやしくバ下帰ふくして德日々に厚くなるべし

○子禽問於子貢曰。夫子至於是邦也。必聞其政。求之與。抑與之與

子禽も御弟子なり子貢への問ニ聖人常ニ是の邦か此の邦ニ至るかその國の君必て政道のことを聖人へうかがひ聞めるかたとへ聖人の德大なりとも實ニふしぎニぞ覚ゆ

○夫子とハ聖人を尚の詞なり今世俗のいひ習ハせる貴人といひ尊公といふ詞づかひニ類せ

子貢曰。夫子

夫子之之を求るハ其諸人之之を求るに異なる與

子曰まハく父在バ其志ざしを観父没して其行ひを観る三年父之道を改さむること無を孝と謂可（矣）助字

有子曰く礼之用ハ和を貴とし先王之道斯を美と為小大之に由

温良恭儉讓以得之。夫子之求之也。其諸異乎人之求之與 子貢の對それ夫子ハ元より大聖不測の御徳なるびなれバ人と共なり聖人の歩き過るふところ人自ら霊徳に化し存るふところハ神明のつげうし照しるふ是れを過化存神の妙といふ故に聖人右の事に與るを得るふハ他人の求むるふとハ其諸異なりとし吾聖人の傍に侍て常にその五ケ条ハるくやうに覚ぬ温とハうち和ぎて寛裕なるよりて良とハ言語直にきこへやそし恭ハ敬まひの外へあらハ人おそれ服するをいふ倹とハ諸事めぐらずして法あり讓とハ身を高ぶらずして人にゆづるかくの如く心に覚しるて

○子曰。父在觀其志。父没觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣 およそ子たる者父母世に在ますときハ志ざしを押て操をくづさぬとなし然ども時によりてそのきざしハ動くとそのくまくら父母世を没すれバ身の行事多くハるんでよまそく方なりきの故に志ざしと行を観てよしあしを考るに大てい父母没まひて三四年ぐらいを経といへども父母のいましをおもふ道を改むるに忍ぬわざなるハ孝心なりと謂べきなし

○有子曰。禮之用和為貴。先王之道斯為美。小大由之 礼とハ高下尊卑位を定るより万事もてなつかふ交接の間聖人よりもと為に法を立るふをいふなり然に礼法のくきびしく執まりり和ぎ

行ハれざる所有和を知て和を礼を以て之を節せざれバ亦行ふ可からず

有子曰く信義に近し言復可也恭礼に近し耻辱に遠かる因其親を失ハざる亦宗とす可し

子曰まハく君子ハ食飽を求ること無居安を求ること無事を敏して言に慎む有道に就て

ちに時ハ却て法のやぶるることなりたとへバ父母にハ礼を重ずべきにあり法のごときを用いバ恩愛乃うすくしてきをうしなふ政道にくいても罪の重も一等をなだめて遠嶋を用いるを和といふ先代の明王礼を用るふに和を貴るひ大小よろずの事もさの道にまかせおひ由るふとなり

有所不行。知和而和。不以禮節之。亦不可行也 これあるに和くといへども用不可行となり子細ハ人和のくを好で押くしきに溺る時ハうちなしぞ無礼不和となるさいを以て和を用るにハまさ礼法を以て節制をなしべし然ざれバ見ぐるしふして行ひがたし

○有子曰。信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。因不失其親。亦可宗也 信とハ言の約そく違ざるなり信を守るといへど道に叶ハざるハ不義として悪べし若よろしきにかなひ義に近くバ元よりその言をまもりて復なふべし恭とハ人をうやまふなり恭といへども諂にならんやうにたるハ君子のふくむところなりをし礼法にかなふときハ耻辱にもなるまじきとなり親しく因といふも親類より次に他人とその次弟をうしなふべからずしておさめの人もその宗べしと云

○子曰。君子食無求飽。居無求安。敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也已 君子ハ道を樂み学を好むその外を願ひ

正を学を好と謂可也已

子貢曰く貧くして諂らふと無富で驕と無バ如何子曰まハく可也未貧くして楽く富て礼を好む者ニ若不ぎして徳を成くを尚べきなり飽くい食事さくの上ニ珍味酒食をかさぬるなり安居くハ家の住居おのゞ分ふさくて奇麗をきハめてひろきを好なり君子ハおの類を求るくなく行ひを敏て言ふ出くを慎く凡て道有人ニ就き〻ひて身の行義をきくたゞそれ誠ニ学問を好くその厚く謂べし

○子貢曰貧而無諂富而無驕何如子曰可也未若貧而楽富而好禮者也

子貢づうの工夫をきくし聖人へ問奉るるそれ小人ハ貧窮身をくるしむる時ハそろ必て清うくぞ神仏ニ祈誓し或ハ出家遁世しまくハ福人ニまび諂ひまくハ權門ニ歩をもこぶくなり又小人の富さうくるる時ハ已ゞ栄耀分限を憚うくぞ人ニ驕ぶり少の恵といふくをなゞしりくものを惑をさくバ如何あくんくの問なり御昔その義元より可くいへべきなりそこ一段その上を語バ貧きくいふとも天數の定まる時節いふ事をさくり只道の楽きを社たくくもべくし富くる身ニいくうきるバ万事くのくふくなるをバ礼法を尚く分を守て古人を友くし楽くの場をうくなふべうくぞ汝ののぶる処ハまくよ不若くぞ仰らるくし

子貢曰詩云如切如磋如琢如磨其斯之謂與

子貢の工夫あり〻その上をまくく聖人の深ゆくへを承り詩経の辞ゞひきて賛し奉まるるものなりたくくバ細工をなゞに角ハくゞめ切くゞき玉ハくゞめ琢くゞくその上を磋磨して遂に重宝の品くなる如切如琢くハ子貢ふう〻已ゞ述くくろろまたくふ如磋如磨くハ聖人の深きゆくへまを比くて徳を成就さるにたくふ詩経の心くそ其斯之謂ニなくるべくくぞ

子曰賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者

賜ハ子貢の名なり聖人聞くめくして子貢のまそく学問ニ進を稱るひ今より始て與ニ詩経の徳をも言がいらくく已矣くの仰なり誠ニ往にかくう〻事を以て後ニ來くくろの意を知るの才なりくく称くあふるる

○子曰不患人之不己知患不知人也

凡そ人おのゞの身ニ善くを得くるハ即ハち我徳なり人より我ニ徳あるくを知くを患むまくゞきなり願くハ徳ある人を此方ニ知ざるを患乃くくなり徳ある人を知ぞなくバそれふくそ就まくふて善くを聞ざきものなくぞや

子曰まハく賜始て與ニ詩を言可已矣諸ニ往を告て來を知者なり

子曰まハく人之己を知不を患へ不人を知不を患

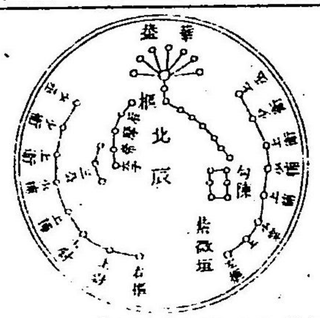
爲政第二

子曰まハく政ごを爲に徳を以てをバ譬バ北辰其所ニ居て衆星之ニ共ゞ如くし

爲政第二

子曰爲政以德譬如北辰居其所而衆星共之

此段天下の政道を論じあくり政ごニあづくる者ハ謹で考べくし大てい世を治るの人多くハ利用を專くくて理法權の三ツを用ゆる事ニなりぬ利用くハ勝手よきやうふをくなり理くハ夫くの是非さくうりたくく是非ハ分くも法ニかくわる事なくバ是なる事も細鎖なる品ハくなる理もあり法ふもそれぞくも權威の重を以て之を抑るくかくるる天下を治るの肝要なり然ゞるその職ニようなる程の才智なる人時ハ又害あり治世永くづく時ハ極て金銀の利用を上へ用ひ權を先へ立て理く法ハ次ニ



子曰まハく詩三百一言以て之を蔽曰く思邪ましま無

子曰まハく之を道びくに政ごを以て之を齊くるに刑を以ても民免うがれて恥なく無

そく依て大方ハ諂ゝ賄賂ゝの二ツ行ハるゝ事なり古の聖王ハ民の爲ゝ利用を施し仁義の德を以て政ごを行ひ給ふゆへゝ天下の万民なつき順ごふて道を守るゝたゝへバ衆の星北辰を守て廻ゝ共ず如くなり北辰ゝハ天の中央北極の辰ゝある五星をいふ盈夜万代動うごゝして其所ゝ居あるなりまを帝座と称して天の分野ゝて天子の事に當る衆の星ハ諸の臣下万民ゝ當比まるなり衆星ハ北辰を中ゝ廻てこれゝ旋共ゝなり分野ゝハ野ハ土地の事なり天の星を目當ゝ廻てゆるゝより此方まぐハ何國の野なりゝ野ゝ分て名付なり此章尤ゝも謹て按ずべゝゝいふ

○子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪

四書の中ゝ毎ゝ詩の辞を引て其詞葉三百篇を載なり古代ハ人ゝ民間まぐゝも歌謡りてあそびゝゝなり天朝の万葉集のごゝ辞古雅ゝて教の意ふゝ今ハ儒者ゝいへゝも通暁ずゝなり其おゝハ老少男女貴賤都鄙相ごひゝ人情を通じ知なり聖人も詩經を知ずゝてハ面を牆ゝあたる如く行つのもなゝゝ仰ありゝなりさて聖人の仰ふハ詩經の意多ゝいへゝも其德一ツの言を以て述蔽さるゝべゝなり他の義ゝなく詩の德を心ゝ意得なそふゝバ人ゝ邪悪の思ゝへて無やうゝあゝべゝゝなり

○子曰道之以政齊之以刑民免而無恥

子曰まハく之を道びくに德を以て之を齊くるに礼を以ても恥なく有て且格

子曰まハく吾十有五にして學に志ざす三十にして立

四十にして惑不五十にして天命を知六十にして耳順ごふ

國を治民を道びくふ政ごを以て事後世ゝなる例なり政ごハ法度禁制の筒条を崇て示ゝ戒りゝ違背の者ありて之を犯バその輕き重きにまぐふて或ハ鞭ゝ流罪ゝすゝハ殺等の刑を以て懲ゝむをゝ依て民恐を齊くゝのふのなり聖人仰ふハかくの如きりのハ仁者の德政ゝハいふべゝゝ何くなれバ民さゞ刑を恐て邪悪をあゝハさるゝゝふて心中ゝハ邪悪を恥あゝくゝもるゝゝろ有まゝなり

道之以德齊之以禮

有恥且格

聖明の君ハ德禮を以て民を道るゝなり德ゝハ身ゝ孝弟を行ひ賢者を貴て挙りひ礼を以て臣を使ひ仁愛を用て民ゝ臨む税歛貨殖を薄く省さよく貧民を救ふ然ゝれハ万民上を載うごゝる者ハあゝじ加之なゝぞ義理作法の礼ゝあるゝを民ゝおゝへ知ゝむ然ゝきハ下ゝる心ゝ邪悪の道ゝぬゝを心ゝ恥てよく齊るゝなり遂ゝ善ふ格ゝもまゝ格ゝ化まるゝもいふ鬼うく世の安うゝぬその本ゝいゝハ民ゝる義理の心をうゝふよう起る義理をうゝなふの本ハ家の産業をゝきよりゝ起るなり人君ふのゝ之を思ひゝへ

○子曰吾十有五而志于學三十而立

聖人自う御執行の事を述ふなり聖人ゝいゝぐもるを学びふをゝゝ聖人仰らるゝゝハ学に志ざゝハ吾十五の年なり道理をゝ記まゝ見識まゝゝ立ゝハ吾三十の比なりゝのふ

四十而不惑五十而知天命六十而耳順

立ゝいふハたゝへバ人の行ざさ道ハ實ゝあゆうゝ在べきりのゝ心の内ゝ一角立るなり不惑ゝハ本よりさゆう

七十にして心の欲する所に従ひても矩を踰不

孟懿子孝を問ふ子曰まハく違ふ無し

樊遲御ふす子之に告て曰まハく孟孫孝を我に問我對て曰く違ふ無しと

樊遲曰く何の謂ぞ子曰まハく生ハ之に事るに礼を以て死も之を葬むるに礼を以て之を祭るも礼を

に有べき事にて理といふものに別にようぶべき事にあらぬ天命にハ天地の間万物何によりてその理をもとめよう備り自然に定まり由來ある事を心に悟知る耳順ハいのやうに事も耳に順てその理おのづから通じ

七十而從心所欲不踰矩

とハ人間の德といふハ年を經て大德成就をしる聖人も此のごとく七十の御年ハ心に思ふまゝ何事にてもそのまゝ行ひるふまゝ自然に人の法則となる天地の矩に踰ざるハなり人聖人ハ生知にして生まながらにして何ものを獨知るふまゝ心得よりて依てかくのごとく御深切に説ひ吾も学問ハ執行の階級あり〳〵と示し味ふべし

孟懿子問孝子曰無違

孟懿子ハ魯の大夫なり孝の道を問奉るなり御答ハ只そむき違まなれやうに有べきとのうと仰なり

樊遲御子告之曰

御ハ車を引廻す役なり御弟子樊遲折ふし御車の傍にあり故に右の事を告ふふハ孟孫前に孝の道を我に問しゆへ無違と答へしがいかゞ悟りや不審くなり

樊遲曰何謂也子曰生事之以禮死葬之以禮祭之以禮

樊遲對て何なる謂ふ候やと聖人仰にハ父母につかへ奉るふハ身の分限を乱るまなく親の心の安るやうに事るを礼といふ已に死してハ哀みを盡して死を送り世に在して如く事奉るを

以ても

孟武伯孝を問子曰まハく父母唯其疾を憂又一ツの説方ふハ父母にハ唯其疾のみ之を憂しむとあり

子游孝を問子曰まハく今之孝ハ是を能養なふと謂犬馬に至まで皆能養なふ有敬セ不バ何を以て別ん乎

子夏孝を問子曰まハく色難し事有バ弟子

礼といふまゝ七年或ハ十三年に程を経て祭を礼といふか如くのごとく生ては死に祭ては礼を盡して事るに於て違ふまなし義なり此より以下まべて門人衆の孝の道を尋に答ふふく知べし

○孟武伯問孝子曰父母唯其疾之憂

武伯ハ孟孫の子なり聖人孝の道を説ふふ凡そ父母の子を思ふ何までのことなし尤もこゝろを子の疾病るふハ憂く甚しよりて子なる者ハ身を謹て守るを以て孝とし疾ハ多く身を謹まざるより起るまゝ一ツの説ふふハ疾といふものハ思ひ構ぬものなれバ是非なしまゝ疾を唯父母に憂さしむべし疾の外にハ父母の氣にかゝる身持のなき程なしバ孝なしんとぞ

○子游問孝子曰今之孝者是謂能養至於犬馬皆能有養不敬何以別乎

子游も文章を以て名を得し御弟子なり御答今之にて孝行といふハ父母をよくあそばす養ひさへすればよしと思へども孝にあらぬ鳥獸にかゝる自身すき好む品にてさへあれバ皆物を入て能養ひそだてるにあらずや然バ養ふのみハ孝にあらぬを恐まふ敬まふ道を第一とすべき孝なしんぞ恭敬の礼なくなる時ハ何を以て鳥獸を養ふの別ちあらんや

○子夏問孝子曰色難有事弟子服其

其労ヲ服酒食有バ先生饌ヲ曾テ是ヲ以テ孝ト為乎

子曰マハク吾回與言フ終日違不ト愚ナルガ如シ退ぞひて其私ヲ省ルヲ亦以テ発ルニ足ヲ回愚ナラ不

子曰マハク其以テ所ヲ視其由所ヲ観其安ズル所ヲ察ル人焉ぞ廋さん哉人焉ぞ廋さん哉

勞有酒食先生饌曾是以爲孝乎 色難シハ父母ニ事ルハ鬼ク顔色ヲ易ウ有ル事ヲ弟子其ノ勞ヲ代ハルヲ酒食ヲ先生ニ饗ス是ヲ以テ孝ト為ル乎

○子曰吾與回言終日不違如愚退而省其私 回ハ御弟子顔淵の御名なり聖人の御門中ニ世ニ節用集ニ書ヨモ三ハ六ケ布ぶんをうけ或ハ早くか番ニ先生の方ヘ就そなふべ是等を以て孝の道と為乎

○子曰視其所以觀其所由察其所安 人焉廋哉人焉廋哉 右ノ如ク其人

子曰マハク故キヲ温テ新キヲ知ル以テ師ト為可

子曰マハク君子ハ器ナラ不

子貢君子ヲ問フ子曰マハク先其言ヲ行ヒ而シテ後之ニ従フ

子曰マハク君子ハ周ク比ラ不小人ハ比シテ周カラ不

子曰マハク学ブ思ハ不ハ則チ罔シ思ハ不ハ則チ殆シ

子曰マハク異端ヲ攻

柄ヲ試ミバ焉ヲ胸中ヲ廋ひげん哉

○子曰温故而知新可以爲師矣 学問の德の高なるハ故習学ふる事を考へ温て自の工夫して新き事を悟知るべ然バ人の上ニ立て師と為ても可 若今耳ニ聽や否口の齒ニのせて人ニ高ぶるものハ口耳の間四寸の学にて胸中つたなさのみ

○子曰君子不器 君子ハ一節ニ偏寄ラ

○子貢問君子 子貢君子の道を問奉る御對世の人多くハ口ニ誠ラ言を好く

子曰先行其言而後從之 子貢君子の道を問奉る御對世の人多くハ口ニ誠ラ言を好く

○子曰君子周而不比小人比而不周 君子ハ周ク日月の清き海の如く照ふぶく依怙贔屓の比なく又下ぐの小人ハその裏腹なるバ

○子曰學而不思則罔思而不學則殆 今日学問をなすにも習ひ聽まくして思をさ其理を求めざれバいつまでも智闇なるたまく心ニ道を尊び思ふくいんども学バざれバ心殆なり貴人を敬ハんと欲へども礼を不知ハ心殆なり

○子曰攻乎異端

る ハ斯害なる也已

子曰まハく由女ハ之を知を誨ん乎之を知を之を知と爲知不を知不と爲是知也

子張祿を干るを学

子曰まハく多く聞て疑を闕慎で其餘を言バ則ハち尤寡く多く見て殆を闕慎で其餘を行へバ則ハち悔寡し言尤寡く行悔寡けしバ祿其中ニ在矣助字

斯害也已 都て流義のちがひ心ざて違ふを異端といふ端の〳〵なり〳〵却て斯害の害なる而已〳〵ぞ

○子曰由誨女知之乎知之爲知之不知爲不知是知也 由ハ御弟子子路の名なり仰ハ女ニ知者となるの道を誨べし〳〵ぞ不知〳〵を知顔ニまそる〳〵人の病なり鬼ニうく知之〳〵ハ知〳〵ふて苦し〳〵ぞ不知〳〵ハ不知といひて少〳〵も慙なし〳〵賢者ハ逢て問尋べし〳〵早速身ハ益あるこなり是知者といふ者也〳〵ぞ

○子張學干祿 御門人子張の爲人ハ官を得祿を得て勢を得んこを好むハ干ろ祿を干るの事をまなびし〳〵ぞ

子曰多聞闕疑慎言其餘則寡尤多見闕殆慎行其餘則寡悔言寡尤行寡悔祿在其中矣

聖人官祿ニ居べきの道を告るハそれ官ニ有者ハ鬼うく口ハ言くちろ〳〵身ニ行を慎むべし〳〵万事の理を人ニ多く聞てその内疑ハ〳〵き事あ〳〵バ闕置て必ず知顔ニもべ〳〵乎〳〵問奉まろる御答國を治るの肝要ハ正直の人を上へ挙て枉諂諛人を其人ニ捨置べき事なるも〳〵枉ろる人上ニあるて万の法ハれよ出バ万民元より服もべ〳〵ぞ〳〵なる○人を敬まひて言ものく〳〵ハ權威の人や婦人のものニ愛相をさるぐの者ハ多くハ正直なる者〳〵○黄門明公の仰ら〳〵

○哀公問曰何爲則民服孔子對曰舉直錯諸枉則民服舉枉錯諸直則民不服 哀公ハ魯の國の君なり何爲國中の人民歸服を

○季康子問使民敬忠以勸如之何子曰臨之以莊則敬孝慈則忠舉善而教不能則勸 魯の大夫季康子の問なり下〳〵の民ども上を敬ひ忠義をいざくやうに勸るハ如之何ハいかし〳〵て宜きやと問奉まろる御答上ニ立人下〳〵に臨まるにハ莊さ身持第一なり莊くハおもく〳〵しく訓て人を罪まるるも人を取立るハも輕布セざるべし〳〵かり初ニ罪すをバ却て片落なる事あるまく〳〵るぐ〳〵く取立まバよく勤さる者をもう落もものなるこうろく布物をろう挙まバ下怨なり依て上ニ立人莊なまバ則ハち民より重ト敬まふなり上より下を孝慈ハ則ハち下より感じて忠心を抱くなりさて善者ハ云ちゝ挙まく善事の不能りのをも捨ぞ無藝不能なる者をも不捨〳〵て是を教る時ハ下〳〵道ニ勸むなり〳〵ぞ治世を見るに諸侯ニ達才の人ハ至て希なり然ども僅ニ書ろ

哀公問て曰く何を爲則ハち民服を孔子對て曰まハく直を挙て諸の枉を錯バ則ハち民服を枉を挙て諸の直を錯バ則ハち民服セ不

季康子問民ニ敬忠以て勸使之を如何子の曰ハく之に臨ニ莊を以もれバ則敬なり孝慈なるをバ則ハち忠る善を挙て而〳〵て不能を教ゆをバ則ハち勸む

或ひと孔子に謂て曰

く子奚ぞ政ごを爲不子曰まハく書に云く孝なる乎惟孝なる兄弟に友なり有政ゝ施を是亦政ごを爲なり奚ぞ其政ごを爲ゝ爲子曰まハく人そゝて信無バ其可を知不大車輗無小車軏無バ其何を以て之を行ん哉

画を好るゝバ其國中の小人ゝる挙て稱もる事なり高位の德ハ少ゝなりて氣味あるを見バ下その倍を以て唱へ出る事なりふを君子の下へ施もゝくのゝ〻ぞ其兆あるを見るゝ

○或謂孔子曰子奚不爲政聖人暫く國の政道ゝ與ゐざゝゝ〻その時或ひゝく甚惜に曰ひて曰やう今聖人ゝハ大德を抱るひ子曰書云孝乎惟孝友なるゝ奚ゝ政道を爲るバざるやゝ

子兄弟施於有政是亦爲政奚其爲爲政御答書經の語ゝも見ゝる家ゝ有てハ孝乎父母ゝ事て惟ゝ孝行なるべゝ兄弟の間ゝ于ハ友ゝ親むべゝ是ハ一家の政なり國を治るゝも其義をゝ廣めて國家ゝ有處の政道ゝ施もゝくなるバ何をゝふまも政を爲なゝ奚ぞ其格別ゝ國政をのゝ政事ゝ爲やゝぞ聖人思召あり て事ゝようゝて明さまに告るハぞ當時身をひきるふ訳を仰ありてハ國の君ゝ及ゆへもり是まゝ忠の至るゝぞや

○子曰人而無信不知其可也大車無輗小車無軏其何以行之哉今日人ゝ生をてハゝの信を第一ゝぞ信なふゝてハ立べゝ〻この故ゝ仁義礼智の四ツゝも信を下ゝ置たゝへバ仁義礼智ハ東西南北春夏秋冬の如くなり信ハ中央ゝ土用ゝに比ゝて此を除て立べゝ〻ぞ信ゝハ道を違さるなり君父ゝハ恐ゝ孝ゝの道を違べゝ〻ぞ他ハ推て知るゝ人ゝ而はの信無バ其可べさの理を不知信なさ人ハたゝへバ牛車の肩ゝ掛る輗なゝ馬車の軏木なさゝ同

子張十世知可を問子の曰ハく殷ハ夏之礼ゝ因損益もる所知可ゝ周ハ殷之礼ゝ因損益もる所知可ゝ其周ゝ繼者或バ百世ゝ雖ども知可也

じゝるゝ何を以てゝ道を行むる理あゝん哉ゝなり

○子張問十世可知也子張の問なり大てい人十世ゝ先の永きゝを計知るべゝや如何ゝなり子曰殷因於夏禮所損益可知也周因於殷禮所損益可知也其或繼周者雖百世可知也此段怪き問ゝ正き御答是誠ゝ聖人の妙言なり且世の大切なる者をあげて此後ゝても知らゝ訳をのべゝ〻即ハち聖人の御代ハ周の御宇なり周の前を殷の代ゝいふ殷の前を夏の代ゝいふ夏の代四百餘年の後殷ゝなる然るゝ天下を治る大事の礼法ハかへ捨べきの理なゝ一年の月日を十四ヶ月十五ヶ月ゝもなるまゝゝくまゝゝ罪の重を生ても置まゝゝきなり是をバ殷ハ夏の礼を捨ぞゝて因用ゝハいふなり殷の代六百余年の後今の周の御宇ゝなる是まゝ殷の礼ゝ因なり然ども時の宜ゝまゝゝごふて事の品ゝよりて益ゝ損ゝの義あるハ可知なりたゝへバ夏の代ハ今天朝ゝ用るゝ寅の月を正月ゝ用るゝなり殷ハ丑の正月ゝて今の十二月を用るなり周ハ子の正月ゝて今の十一月を用るなり是子ハ天の時丑ハ地の時寅ハ人の時なるゝ故なり其心ハゝの世界をべて天道を戴くゝふ理を用ひまさハ地ゝ養りるものなりゝの義まゝゝハ人の世なれバ人を尊ゝふ義より起なり文夏ゝハ人ゝ交るふもてゝろうの忠を尚ぶ殷ゝハもてゝや進物の質なり周ゝハ節の文を用ゆる類少ゝの損益ハ代ゝふつきて異なる事なり是を以て推時ハ此後周の世ゝ継て興る御代の幾度或て乃至百世後の事なりゝも必ゝ知べき道理なり

子曰まハく其鬼に非して之を祭ハ諂也

義を見て爲不ハ勇無也

八佾第三

孔子季氏を謂ハく八佾庭に舞を是を忍可んバ孰を忍可からん

○子曰非其鬼而祭之諂也　鬼とハ人の死るを今いふなり　天朝にハかくとハ天竺にてハ仏とも中華にてハ通じて鬼神といふ然るに子たる者その世なきバ家の事を已ゞまくに依て大小吉凶の事ども必ず父母先祖乃鬼神に告申べきなり正當の月ハ父母先祖を祭るに俗人動もすれバ欲なる願に就已ゞ祭るべき先祖の鬼にもあらぬ高位他人の家の鬼神を祭る事有うそれハ諂といふものにて必ず利益あるべきなり　委細ハ　天朝鬼神論に云へるハ此に略す　見義不爲無勇也　此段志ある者尤も重べき所なり何事にても是ハ義理にあらざる事也知らバ身を苦むるを不厭で行べし忠臣に害を殺すべし是ハ道に叶ハぬ知らなどの如くそに見て不爲ものあり是憶病の第一勇氣なくして人の上に可置ものにあらず

八佾第三

孔子謂季氏八佾舞於庭是可忍也孰不可忍

聖人魯の卿大夫季孫氏の所爲を評して謂まふなり季氏ハ倍臣の身にして我意増長して天子の音樂八佾の舞を我庭上に遊覽する事その罪を糾ハ忍も尚愚なり是をも堪忍て犯ゞの季氏なをバ孰いかの事をも忍ハ不可さなるなの御詞の趣意ハたゞバ主君を弑し奉り父母を殺害いかなるも可忍

三家者雍を以て徹す

子曰まハく相る維辟公天子穆穆奚ぞ三家之堂に取ん

子曰まハく人にして仁なるバ礼を如何人にして仁なるバ樂を如何

林放礼の本を問子曰まハく大なる哉問

ちゞの者なりの仰くそれ下にして上を輕し臣にして君を慢ハ聖人の悪ミるふ尤も甚し況やなをハ天子の礼法なるぞや　天朝の道を以て論せバ尊ふ

ふのぶるも汚れ重々の刑罰を行ふもなを輕くも八佾の舞ハ天子の舞ハ樂人の佾八行なり諸侯ハ六ツ大夫ハ四ツ士ハ二ツなり

○三家者以雍徹子曰相維辟公天子穆穆奚取於三家之堂　さて此ハさ季氏のミなるぞ季氏孟氏叔氏の三家おのゝく悪逆無道と聖人ふるく罪しるふそれ天子祖宗を祭るふに祭礼畢て徹るふ時まの雍の詩を論樂を奏して之を行なるの故に雍の詩の詞も御相の人ハ維ハ辟公の方くなり其体くなく誠や天子の御事ハ只何くなふ穆穆して恐ありて尊くなり然に三家の者奚の理ありてか礼を犯し已ゞ堂に之を行ふや天人ともに罪をくゞふべき事なり　天朝に於て一向詞ものぶる事有るべ

○子曰人而不仁如禮何人而不仁如樂何　仁とハ本心なり梅桃の實を桃仁梅仁といふも同義なり人もし本心の德なふして不仁なるバ義理作法の礼も相和親睦の樂も如之何ゞ如何ゞ有まじき

○林放問禮之本子曰大哉問　御門人林放心に思ふハ今の礼法といふハ飾つくろふを專にして起居進退衣服すべて表をそくろふなるぬ礼ハ人の作法といふバかりにて本を問奉まるる依て聖人之を誉ひてその方の問

礼ハ其奢ん與ハ寧倹
そ喪ハ其易與ハ寧戚
子曰まハく夷狄君有
諸夏之亡が如なら不
季氏泰山に旅す子冉
有に謂て曰まハく女
救ふこと能弗乎對て曰
く能ハ不子曰まハく
嗚呼曾て泰山林放に
如不と謂乎

そ志しありく大なる哉と禮與其奢也寧儉喪與其易也寧戚

乱を説るにまそ乱の本意といふハ表向美麗に飾を務るを悪で中心の誠をたつとむなり是故に身の分限より奢侈美麗なるを欲せ身の分よりも倹めに有べし乱の前にたつへバ父母の喪を執ることなふにも諸事不都合ならでよく易たゞしん與ハ寧前後をも忘る戚しく取乱しろもわぐなるが殊勝ふしてそ覚かさの故に乱ハ内に誠を積て外に飾を務るハ本旨にあらざるなり

○子曰夷狄之有君不如諸夏之亡也

世衰へ君臣礼義を損ひ乱ゑ天下道なきを嘆るふ因て仰られしにハ今礼楽なる夷狄の國すくも君といへる者あれバ上下の分限作法ありと見ゆるにあるふ我諸夏ハ礼楽文章の根源に在ながら臣として君を棄んとするもあり倍臣として天子の礼を犯すのなり誠に人面にして獣心の行なり君臣の名のミありて礼義を正すもの亡ハざれ夷狄にも如不なりと○天朝ハ万邦の宗たる事今さらに非といへども誠に君臣の道天地日月の如く万代不易自然と相犯すことなく其光明なり固より中華夷狄の及べきにあらず諸夏とハ夏ハ大の意なり中華ハ諸くの大國ある土地なりとの義なり

○季氏旅於泰山子謂冉有曰女弗能救與對曰不能子曰嗚呼曾謂泰山不如林放乎

季氏まハ諸侯の礼を犯して封内の泰山を祭まう旅とハ山の祭なりさのぶん季氏が上を海慢て無道なるを罪しるひまハ人の臣たる者ハ君を强て諫べし若用ざればば官禄をすて去るべきを説示しるふなり御弟子冉有その時季氏に事て臣となれり聖人叱らせるふやう八季氏今礼を犯せり汝もし主に忠なれバその不義なるをいさめ救ひえざりや冉有答奉るハ季氏の心たかくして諫ることを用ることを能不と聖人やゝ仰せらるゝハ神ハ非礼を受ずとく今泰山の神霊季氏が礼を受べからずそ吾門人林放さへ礼を正すことを已に見たり泰山の神もしさの礼を受るバさきに林放に不如なり女も曾てさゆうに謂たがへるにや嗚乎とハあはれびの心まさにハなげきの心ふの紀くさの餘意なり

○子曰君子無所爭必也射乎揖讓而升下而飲其爭也君子

争怒といふものハ心挾く量の鄙きより起なり忽ち耳に聞怨ち目に見ることを了簡せざる故なり月日を踰てハさしてもなき事ともなり仰せあるやう但し君子にても争事のあるハ射礼の時堂上に升堂下に降るに就て之有ことそれハ勝者と負る者互に已まわことざるの揖譲ありて酒を飲となりあゆうれ争也を君子ハ致となりと仰らるゝ徂來先生の語にもそれ人の争といふハ自身乃存じようを信向せざる人に是非に信向なさしめんとするより起るなりと云々

○子夏問曰巧笑倩兮美目盼兮素以爲絢兮

子曰まハく君子ハ争
そふ所無必ず射乎揖
譲して而して升下て
而して飲其争そひハ
君子なり

子夏問て曰く巧笑倩
〻う美目盼〻う素以
て絢を爲〻何の謂ぞ
子曰まハく繪の事ハ
素〻後にす
曰く礼ハ後乎
子曰まハく予を起す
者ハ商〻う始て與〻
詩を言可已矣
子曰まハく夏の礼ハ
吾能之を言杞徵さる
に足不殷の礼吾能之
を言宋徵するに足不
文獻足不故也足バ則
ハち吾能之を徵セむ

何謂也 子夏詩の辞〻ぶひあり依て工夫を問奉まつるやうかの詩経〻美人の笑ハ口輔の巧倩兮なるがむる目ハ盼兮に美〻〻然〻素ものを以て其上〻絢さを益〻あり何の謂〻候やと

子曰。繪事後素 御答これ繪画の事〻て本美人をかくふハ面色肌骨ハ素粉を以て仕立夫より彩色を施〻なりけ〻を素より後ふそ〻ハいふなりけを詩の詞なりたと〻ハ人も信〻いふ下地ありて衣服をかざり音信の礼あるべし〻〻

曰。禮後乎 子夏又曰く然らバ其理を以て推そるに今日人の礼と〻ふ者ハ尊卑〻もに人の交ハ〻上表〻施こそものなれバ彩色〻同じ〻〻て末なり然バまづ其下地あるべきなり先忠信を以て本〻して而して礼を以て絢〻さを爲べきもの乎〻詩の詞より礼の工夫ふ〻〻〻学問ゐん切の至〻

子曰。起予者商也。始可與言詩已矣 聖人之を称ゐひ誠〻予を起こす者ハ子夏なり今より始て詩の〻を與〻言ぶ〻〻〻〻ぞ仰らを〻

○子曰。夏禮吾能言之。杞不足徵也。文獻不足徵也。殷禮吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣 此段聖人夏〻殷〻の礼を述るふものを〻も大切〻規短〻なるべきものハ消て不足夏の代殷の代此二代の礼法をも能言之説をぐも考訂べき證徵不足杞の國ハ夏の末宋の國ハ殷の末なるものをぐも此二國〻文獻無る故〻證徵〻

子曰まハく禘既に灌
して自往者吾之を觀
を欲セ不
或ひと〻禘之説を問子
曰まハく知不其説を
知者之天下〻於る其
諸を斯〻示ゞ如乎其
掌ごろを指ざ〻

○子曰。禘自既灌而往者吾不欲觀之 禘〻ハ周王祖宗の祭の名なり魯〻詩ふ祭〻香酒を灌ぎ清むる〻あり過し禘灌の往者魯の國礼義衰へ目も不欲觀ふ〻不足也も〻文獻有バ吾能之を證徵〻して尚明ふ〻せんそのをしなり

祭〻ぞ禘ハ先祖〻大祖〻を配セ祭なりその例し

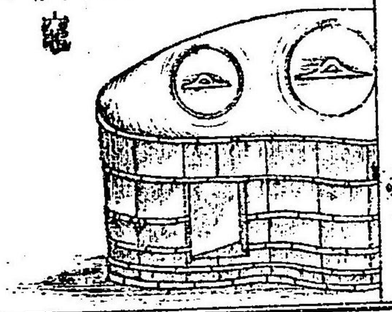
○或問禘之説。子曰。不知也。知其説者之於天下也。其如示諸斯乎。指其掌 此段ハなる人ゞ禘之祭の説を問奉る然〻不知〻の御答ハ右ふも説〻る訳〻そ其理をのぶるに元より天子なるでハ祭らをぬ訳ゆへ魯の國へ數し禘〻〻ろなり即ち上を敬の至なり

○祭如在。祭神如神在 故〻明さまにハ仰なくさ〻其理をのべるふ元禘の祭ハ天子御先祖を上天へ配祭るふ其礼式ハ仁心孝心ふるく誠〻敬の深を用ゆる事此上なし因て仰〻も其禘の説を知るゐ〻の人ハ天下を治るふ道〻於ても心安く世を治めうひまゞ〻此時座上〻ての御ぞろ〻ふ心安きをたゝへて御ぞ〻ふて斯を如示ふあり〻て指を以て其掌を教るゝ

祭〻いふハ子〻して先祖を祭追祭をいふ〻ものハ一年ふ〻ぞ一度の事なるバ何〻ぞ日を空くさべう〻〻凡そ祭の法ハ七日ゞ間ハ身を清め男女交ぞ怒ぞ妄〻〻ひ言語らぞ之を散齊〻名付る後の三日を致齊〻心〻親の事を思ひやり平生の姿或ハ常の樂ハうゆう〻なり〻〻のかやうの事を如〻

子曰まハく吾祭に與ゑ不バ祭不ゞ如し

王孫賈問て曰く其與ゑ媚與ハ寧竈ゑ媚よゝ何の謂也



子曰まハく然不罪を天ゑ獲ハ禱る所無

るひしなゞ思ひ尽セバ自然ゝ神靈を目ふ[illegible]如く左右ゑ在ゞし〻〻近來僧の精進する事ハ訳なるをゞも右齊戒セされ者ようハ勝て親を忘さるなり祭ふ如在の祭ゝしふハ是なり扨祭如在ゝハ古人の語なりそれを聖人説るひて其義ハ即ち神如在ゝしふ事なりゝ仰らをゝるる

子曰吾不與祭如不祭

祭ハ子ら者自祭べし吾身祭の事に不與ハ不祭ゑ如ふゝん〻仰らる

○王孫賈問曰與其媚於奥寧媚於竈何謂也

王ハ氏なり孫賈ハ名なり衛の國權門の大夫なり聖人ゝ時衛ふ居るひしふ孫賈も智ある人なりしゞ聖人を不知やかなりふ無礼の語をいひ出しゝ竈神ハ何方ゝても内庭ゑなり常ゑ人の通處ゆへ蹴塵なゞかりてそまりなれども祭の時分きらゝをバ忽ち清め敬ひ拜まるゝゆへゞ身にたゝへ時節を得て權威ある者ふ比するなり奥ハ家の奥の間ゝて西南の隅を用る事なり常ゑ尊そのゝて是ゝいふて俄ゑ權威なるゝいふゝるさゆへ君子ふたゝん衛の君ゑ比ス當時聖人衛ふ居るふゆへもしゝ君ふ媚りふけ問しゝなりふの心ハ其與ハ尊しゝいへども媚諂て益なしゝ寧ハ竈の如く時を得るに諂ゞ宜うゝんゝの諂あり何の謂ゑ候やゝなる

禱也

聖人の御答なり右の言を聞しめて即ち鬼神の理を以て答ゑふそれ神ゑ媚諂ゝいふゝ然べしゝも覚ぞ今日天の道ハ非礼を悪るふゑ

子曰不然獲罪於天無所禱也

子曰まハく周ハ二代を監して郁郁乎て文なる哉吾ハ周ゑ從ハん

子大廟ゑ入て事毎ふ問或ひしふ曰く孰か鄹人之子礼を知ゝ謂乎大廟に入て事毎ゑ問子之を聞て曰まハく是礼也

子曰まハく射ハ皮を主ゝせず力科を同セ不ゞ爲なり古へ之道也

罪を天ふ獲るる時ハたゝん〻竈の神へ謂祈ゝも益なし禱ゑ所無ゝいふ者也

○子曰周監於二代郁郁乎文哉吾從周

是ハ周の盛なる事を称るゝ夏の代殷の代二代ゝもに聖人の王者出るひ世の道大ていに備ハまゞも礼楽いちゞ調ハぞ周ふ至て右二代の事を監合て始て成就をゝげ誠ゑ郁郁ふ文ある哉も〻右三代の礼ゑ於てハ吾ハ周を尚ふなりゝ仰る

○子入大廟毎事問或曰孰謂鄹人之子知禮乎入大廟毎事問子聞之曰是禮也

魯の侯ハ魯の御先祖周公を祭るふ大廟の儀式也聖人この事ふあり[illegible]ふ此時聖人何一ツゝして毎事ゝる役人ゑ聞合るふ依て或ひ聖人を誹て就う此人を礼をよく窮知るゝ謂つゝん〻乎さの度大廟ゑ入て何ゆへゑ毎事人ゑ問聞合セゝるや聖人之を聞めして仰らるゝふハそれ礼の本ハ敬恭の一ツより出さるゝふてその敬ひゝ〻むハ已を引下人ゑ從を第一ゝいふのやうふ法を極し事も國法まゝ故典ゝいふ事もあるをバ不知を知うゞかるれハ無礼なり即ち大廟ゑ於て毎事ふ問きゝ合るハ真ゑ是礼ゝいふ者ゝ或人礼の本意を知ぬ故なりゝ仰らる聖人鄹ゑ御生なりし故鄹劣にいやしめて鄹の邑人の子ゝ申せしなり

○子曰射不主皮爲力不同科古之道也

射の本意ハ已を正

子貢告朔之餼羊を去んと欲す

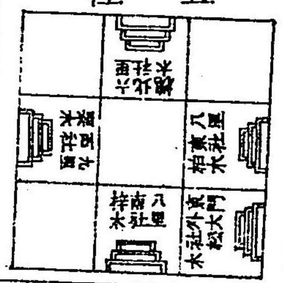
子曰まはく賜爾は其羊を愛す我は其礼を愛す

子曰まはく君に事て礼を盡す人以て諂へと爲す

定公問君臣を使臣君に事ふる事之を如何孔子對て曰まはく君臣を使ふに礼を以てし臣君に事ふるに忠を以てす

子曰まはく關雎は樂で淫せず哀で而傷まず

哀公社を宰我に問ふ宰我對て曰く夏后氏は松を以てし殷人は柏を以てし周人は栗を以てす曰く民を戰栗使む



子之を聞て曰はく成事は説かず遂事は諫めず既往は咎めず

論語五十一

を第一に已が身正しくなり然に當時は革を以て厚く張弦を射遠を主とし古之道は皮を貫くを主とせしかくなきは人人力量の科不同ゆへなり

○子貢欲去告朔之餼羊

古は天子より諸侯へ曆を領與ふ之を拜領して先祖の廟堂へ藏て月の朔日ごとに羊を以て酒宴の祝をなして祖廟へ告奉て後下々へ觸分ちふさ

を朔を告る餼その羊を用て寄合ぞのうなり依て子貢の心に思ふには礼もかけるに弊なる事をいふには無益なりそれよりは之を去やめんと欲なり

子曰賜也爾愛其羊我愛其禮

聖人の御意さにあらぬ其跡貞なりてさ本ふるへる時節もあんら何ぞ吾は其礼の廢ざるやうに愛なり再は只羊を愛いふものなり○天朝にも舊礼の殘てあるども中華天竺の事にいふぞ何ぞ本のごく正しき事のべきも

○子曰事君盡禮人以爲諂也

臣たりて君をおろそかにいふ道に諂の大なるものに依て聖人君を厚く尊敬まるの道を示いふ然ども今の世にて礼を盡さば人人諂やうに以爲なり

○定公問君使臣臣事君如之何孔子對曰君使臣以禮臣事君以忠

此段定公聖人へ問奉るなり君の臣を使のみち臣の君に事奉まるの道は如何となり御答君臣は義の重きを以て合体なせしものなり君の任は周を用ゆ正く上に坐しふて臣下をたのひ人を用ふに倚偏なのべし重威を守て忠に不忠を心にのけぞ是を礼にいふ臣下の任は敬を重しい万事大小に就てうやまひの心をもるまぞ我生命は君に奉ぞ者と定べし君の礼あるになさを心にのくべきぞ是を忠といふ

○子曰關雎樂而不淫哀而傷

關雎は詩經の始にある歌なり文王の德より天下を化しあひて能治を樂めども活乱に流まぞ哀めども身命を傷くなし

○哀公問社於宰我宰我對曰夏后氏以松殷人以柏周人以栗曰使民戰栗

哀公社の義を御門人宰我に問ふ社の義は古へ土地に功德ある人を其處に祭る天朝の鎮守産土氏神等なり社には必ず樹木を樹かとむなり其風儀夏の后の代には松殷の代の人は柏なり當時周の代には栗なり扱いにへは罪ある者を社の傍に戮あるなり宰我對の心は人のおそきを栗といふ今樹木にふさの義をなりて人を戰ひ栗使るなりぞさの段宰我辨舌に名を得て聖人さを責ふ元來社にいゆる木はその土地に用ひて宜きを樹

子曰まハく管仲之器小なる哉

或ひと曰く管仲儉なり乎曰まハく管氏三歸有官之事攝不焉ぞ儉を得

然ハ則ハち管仲礼を知る乎曰まハく邦君樹〻て門を塞管氏も又樹〻て門を塞邦君兩君之好を爲る友坫有管氏も又友坫有管氏〻て礼を知ハ孰か礼を知不ん

右宰我の述〻義ふあ〻ぞ松〻柏〻を問ふ何の義を取て答ん強ていぶ松柏の二木も操節の貞固德を取べ〻せんや謙を君子ハ言語を深く謹むべさなり宰我の辯ハ口ふ出るにまかせ〻ふものなり

不諫既往不咎

聖人右の事を聞めて嚴〻く責るハぞ〻て其後を深く戒めるふ成事〻ハもはや出來まねび事〻誠を成〻事ハ說のせて益なく遂る事ハ諫て益なし既を往さり〻ハ咎むるにおよぶ〻の仰なり○熊沢先生の曰く凡て問ふの人ハその人の言を信

子聞之曰成事不說遂事

〻もるものゆへを答るものも必ぞ已が正〻明めざるをしふまじきなり今の僧ハ只仏の名を唱へ身ふ僧衣を着もるをもうり仏法を天竺の教を以もるを〻ハぬ〻をのべ飾る儒者の

○子曰管仲之器小哉

古への管仲ハその主君齊國家を益なきをあれど〻の桓公の軍師〻なり桓公を覇者〻なり威を以て天下を服〻天子を守護奉まるる然〻も明德仁義を以ぞ〻て才知權謀の下知なり〻〻ふバ聖人いやし〻ふひて小なる哉〻仰らる小ハ心せまく〻ふ〻ちひさきなり

或曰管仲儉乎曰管氏有三歸官事不攝焉得儉

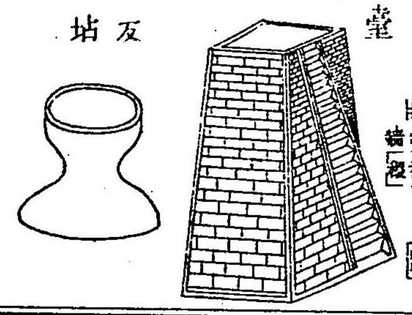
聖人の小〻仰らるを或ひと聖人の御意を知ぞ又うけるりて思ひ〻ふの管仲ハ儉約なる人を候やなる〻の仰ハ聖人仰を管仲儉〻ふもの〻ハ非ぞ管仲ハ遊覽の臺ふ三歸〻号て美々布造作あり又管仲ハ諸衆の臣下ふハ兩役〻官を攝らる者なり大夫の例をもぢまさらう

然則管仲知禮乎曰邦君樹塞門管氏亦樹塞門邦君爲兩君之好有反坫管氏亦有反坫管氏而知禮孰不知禮

或ひと聖人の御意を知ぞ又思を管仲儉なり〻てかく美麗なり〻ハ定て礼義を好〻人ゆへを候や如何御答管仲礼を知るとハ〻ふべ〻ぞ子細ハ一邦の君の屋形ハ表門〻内の見附の間を樹木を樹て塞をなせ〻ふの事倍臣ふるの格式を以〻ぞ平安の本願寺等之を用ふ〻ふ兩君の君の出會ふハ反坫の間あ〻ちぐのひぐるのやう比例まて楹〻楹の間を盃をのせ置げ〻めをもふけ〻ふ今管氏倍臣〻てまく〻之を用ゆ管氏礼を知る〻いぞ孰人もミな礼を知る〻いふべきもの程先生の曰く三歸の奢を礼を犯せりされ器量の小哉所以なり

○子語魯大師樂曰樂其可知也始作翕如也從之純如也皦如也繹如也以成

此時世衰へ樂もを缺聖人これを正〻ふ魯の樂官の大師を〻〻語ふ其樂の心得ハ明らに可知〻也最初曲の起ふハ声を翕如也ま〻〻ふ〻て各声を從散〻て或ハ清く或ハ濁ま〻〻ハ



子魯の大師に樂を語て曰まハく樂ハ其知可ちう始作ふ翕如〻ふ之を從て純如〻ふ

殷如さう繹如さう以て成

儀の封人見んと請て曰く君子の斯に至るや未だ嘗て見ずして見ずを得ざるを患ん乎天下之道無久矣天將に夫子を以て木鐸と爲んとす將於也助字

未將二度よく

高又下く相和らぎ交て純如也然ども各己が音を吹分て皦如ともべて然るに五声別ちて以て曲を成就して終る

○儀封人請見曰君子之至於斯也吾未嘗不得見也從者見之出曰二三子何患於喪乎天下之無道也久矣天將以夫子爲木鐸

儀ぎの封人とは衛の領分なる封を守る人某此時聖人衛を過ぎ給ふ聖人へ見奉まらんと請て曰く君子の斯所に至るへば吾御見を不得ん人へ見奉まらんと請て曰くいつも君子の斯所に至るへば吾御見を不得ん

嘗てようそのぞ之に依て從者の計ひにて聖人へ見をゝげさせむとて御座を立出で次の間にて二三子の御門人衆へ語て曰く今迄の如天下小聖人の法喪ようしハ患まゝ天下久矣ぐ間道無ゝ處に今聖人を見奉まるば誠に時節到來して今より道も起るべゝ夫子を木鐸のかたり天ように振るゝ見へ木鐸ゝハ物をふを知らせ器なる風鈴の大なるやうけものゝ

○子謂韶盡美矣又盡善也謂武盡美矣未盡善也

韶ハ聖人舜帝の樂なり武ハ周の武王の樂なり聖人此二ツの樂を批判なさるゝ小ハ樂を聞てその德を知るべゝ舜帝の天下をゝ

子曰まりく上に居て寛ならゝ不礼を爲て敬なゝ不喪に臨で哀まゝ不吾何を以て之を觀哉

里仁第四

子曰まりく里ハ仁を美と爲擇んで仁に處不ハ焉んぞ知を得

子曰まりく不仁者ハ以て久く約に處可からず不以て長く樂に處可からず不仁者ハ仁に

ハその德美ゝく行ひ輝て善の主とりぬべゝまる武王の德ハ美矣ハ同ぶハそども殷の代を征伐ゝて天下をとりぬと少ゝ醜ゝ天下の人たとんなりき服まる事自然とハいゝども臣とゝて君を伐の名逃のゝゝそれ故に善を尽さぬと天子に姓を譲りのあり勿論乃ちなり天朝元より真の天子の國にゝて中華東蛮の及ところにあらぬ

○子曰居上不寛爲禮不敬臨喪不哀吾何以觀之哉

人の君たる者ハ寛仁を以て德とす寛ハ何事をも急はさゝ付てとり行ハぬ尤も色顔に出さゝぎバ人その胸中を量さと不能なりあゝ人の上に居て寛ならぬ人と撫ハるゝ敬まぬゝて高ぶり喪中哀の節に心もちげに人情を尽まとなさ者ハ何以その觀所なき人なりとぞ

里仁第四

子曰里仁爲美擇不處仁焉得知

此段住居まんべき邑里ハ人情厚ゝて互に仁ある所を美とゝ擇で仁ある里に處べゝ水心を失ぬゝて知惠を得なりゝ其所を失ハぬ焉ん知を得んやとゝ

○子曰不仁者不可以久處約不可以長處樂仁者安仁知者利仁

仁とハ水心の德を我物にゝて義理の塩に心を安つけて在ひとをりゝ不仁者ゝハ心の置處

安ん〳〵知者ハ仁を利す

子曰まり〳〵惟仁者ハ能人を好〳〵能人を悪む

子曰まり〳〵苟くも仁に志ざせバ悪無

子曰まり〳〵富と貴さ與ハ是人之欲す所也其道を以て之を得不バ處不貧さと賤さ與是人之悪む所也其道を以て之を得不バ去不

君子仁を去て悪んゝ乎

をう〳〵ちゆくるなり不仁なる人ハ久〳〵く困窮の場に居て心約き時ハちゆくぎて操節をくゞ〳〵て不義なるものになりまゝ安楽の場に處も礼を守ぎ〳〵て奢たのぶりて必ぎとりう〳〵なふものと因て仁者ハ仁の場に心を安つけ道を守るとかゝく知ゐさと知者ハ気早みゝゝりて我りとまるとなり利とハ身に利徳を付てまゝの手にいろ〳〵の義と

○子曰惟仁者能好人能悪人

仁者ハ私の心なく人を愛〳〵好まるもまゝ人を悪〳〵捨ちもゝゝ義理にをらぎぎとなり

○子曰苟志於仁矣無悪也

人苟に我心より本心をみゞゝて求るに志あらバゝゝろの外へちるとなく悪とゝゝぬ場ハあるまゞきなり

○子曰富與貴是人之所欲也不以其道得之不處也貧與賤是人之所悪也不以其道得之不去也

凡て人の心冨栄と身の貴なるとの二ツを欲ぬこのハあらゞぎまのきゞも道不以冨貴ならバ其場に不處べ〳〵となりまゝ貧と賤きとの二ツハ人の所悪ぎとなり然とも其場に堪のゝ冨貴立身に迷をとるハ誤ちりその場を立さらゞの道不以バいりまゞでもその場に忍べきゝ

君子去仁悪乎成名君子無終食之間違仁造次必於是顛沛必於是

君子とハ仁心を胸に抱〳〵德あきバ此心を去てたりゝぎバ君子の名なく悪ろ德を成就せんやとなり之ゐ因て君子ハ三飯を終食間も心を仁の場に違まめぎ又造次の間も急て顛沛ちゞの間も心を是仁の場に於て留るとなり

○子曰我未見好仁者悪不仁者好仁者無以尚之悪不仁者其爲仁矣不使不仁者加乎其身

凡そ世の人仁を好むハ勿論不仁を悪なりと好まぬちゞの人も見ぎとなり仁に上を好といふ人ハ申ふんなく別にまゝ尚ると元よりなゝ不仁を悪といふちゞの人ハ火〳〵おちめだきゞも道ならぬ不仁ちまゝき事ハ身にちゞさゝ加ろとあら使不となり

有能一日用其力於仁矣乎我未見力不足者蓋有之矣我未之見也

人〳〵ちゝ仁の道とゝゝバ何ぞ骨折に六ケ布やうゐ思ひ力を用ゆちるとなゝ中くさにのる者ならぎ一日まゝて仁に心をよせ力んに力の不足〳〵てつゞのぬといふ者を見未り〳〵又力乃たらぬ者之有この蓋むならきゞも我未之を見ざるゝ〳〵

名を成ん君子ハ食を終る之間も仁に違と無造次必ら〳〵是に於て〳〵顛沛必ぎ是に於て

子曰まハく我未仁を好者不仁を悪者を見未仁を好者ハ以て之に尚るも無不仁を悪者ハ其仁を爲なり不仁者を其身に加使不

矣乎

能一日其力を仁に用る有乎我未ざ力の足不者を見未蓋〳〵之有ん我未ざ之を見未

実未

子曰まハく人之過まち各其黨に於て過まちを觀て斯仁を知る矣

士道に志ざして而悪衣悪食を恥る者ハ未與に議に足ず也

朝に道を聞て夕に死まも可矣

君子之天下に於ける適無莫無義之と與に比ぶ

君子ハ德を懷小人ハ土を懷君子ハ刑を懷小人ハ惠を懷

子曰まハく利に放て行へバ怨多し

能礼讓を以て國を爲ん乎何か有ん礼讓を以て國を爲ん不ンバ礼を如何

位無を患不以て立所を患己を知と莫を患不求て知可を爲

○子曰人之過也各於其黨觀過斯知仁矣

凡て人の過失とするものハ善も悪もその心の依黨するところよりおこるなり君子ハ心厚き誠より而やはり小人ハ薄き不實よりあやまちを引しぶるなり知者の心ぞやくさしるなり者ハ過ぬよりてを本心の道仁の工夫も知るべしなり

○子曰朝聞道夕死可矣

人たる者ハ義理を弁まんバ有べからぬ道を聞て心に得バその夕に命ぬるとも死まらしもそこに可矣なるぞや

○子曰士志於道而恥惡衣惡食者未足與議也

士とハ志のある男子をいふ凡て人たる者義理の道に志ざして鄙き心に引さるべき事なるべき

たしなんバ人とならひ坐して己が衣類の悪きをそこに慙まるハ人に膳部食物の不及を恥まるハ人の權威をうらやましたぐひ未鄙吝をなきものとしぬ者ふて相與に義理の議をなすまに不足なりとぞ

○子曰君子之於天下也無適也無莫也義之與比

凡て德ある人ハ世間の理に於て何事に限ぬ適とし無又莫とも無也只義理に適ち不叶のと心省る事まなく凡て義理に與し比とぶなり

○子曰君子懷德小人懷土君子懷刑小人懷惠

君子ハ常に心の德を新んとを懷小人ハ常に身を安樂の土地に置とを懷君子ハ今日天道の冥加を恐きを懷小人ハ吾身に仕合の惠あるをとを懷となり慎べき事ならぬぞや

○子曰放於利行多怨

人の行ひとのく吾身の勝手に心を放て利分を貪る時ハ必ず怨を受るまと多しとのや

○子曰能以禮讓爲國乎何有不能以禮讓爲國如禮何

凡て大小となく治のるハ人情を損ひ礼法を欠ゆくまの仕合なり若礼讓を以て國を治バ何のかまさるのあらんけんや然ざきバ國家の法令なりとも人之を犯して如何ともあるまじ讓とハ物をおくひまるまで礼の本意なり人くの身の分限をよくぞ冥加を思ふて身を引さげるハ安穏なるべき理なり

○子曰不患無位患所以立不患莫己知求爲

可知也凡そ道德を尊ハさ身の位なきとて患とあるべからず人の上に立べき所以の德の己身になきを患べし〳〵まる己が德を人の知らざるを患べからず自然と人く知可ちゞの德

○子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯參ハ曾子の御名なり聖人曾子の御名をよびのけさひ吾大道の根本を授るゝなり平生吾教る所を人ハ廣く大なるものと見得まゝ成ゞ〳〵と思なれども中く左まあ〳〵ぞそれ吾道としゝふハ誠之至さを一ツなり之を以て万物を貫さとゝふ〳〵人の君ハ立てハ仁の道に止る人の子ハ孝の道にとゞまるとゝ見ても悟得べ〳〵又忠なゝざるハ孝にあゝぞ一と〳〵て皆一理なゝぞやとゝ曾子之を聞のひて早速其理を合点ち〳〵まゝ唯とハ早速に御請を申上のふと

子出門人問曰何謂也曾子曰夫子之道忠恕而已矣扨聖人其席を立出るゝ跡に自餘の御門人ありて合点致さをのゝくや有けむ曾子へ御尋ありてしゝゆう一と ハ何の謂に侯や曾子即ち一貫の理を説のひて曰く夫子今のゝふ所の道ハ即ち忠とて心の誠厚を以て人情を恕とりゝふ事而已矣誠の至ハ是仁心なり仁ハ聖人の大道なり忠恕といふハ仁を工夫まるの道なりとぞりゝうの所ハ学者深く謹でよく〳〵心を籠てゝべ〳〵

子曰君子ハ義に喻る小人ハ利に喻る

賢を見齊きを思ひ不賢を見て内に自ら省みる

父母に事て幾く諫志ざゝ〳〵従不を見て又敬〳〵て違不労〳〵て怨不

父母在ハ遠遊不遊ふ必ず方有

○子曰君子喻於義小人喻於利君子と小人とハいつも表裏なり凡て人の言を聞ても物の理を考へ會得まるまゝ君子ハ何事をも義理に叶ひ道に當るやうと其善方へ喻得なり小人ハ何事をも己が得手勝手なる事に喻なり小人ハ人の善行を見ても夫に理を付妬むのなり辟より何事まも裏へ〳〵ろを廻まゝて誠に愧この〳〵ぞや

○子曰見賢思齊焉見不賢而内自省也人の善事凡て己に賢る事を見てハ必ず吾もその如く齊のゝんと思ひ初のゝべ〳〵又不賢ぬ事を見てハも〳〵や吾身にあゝんと自この〳〵立省〳〵るべ〳〵とゝなり

○子曰事父母幾諫見志不從又敬不違勞而不怨父母に事へ奉つるにハ唯父母の命に背ざるを孝とゝまるのきども父母若行ひを乱とゝるゝハ諫留まゝて君ハ不孝なりゝ〳〵や父母の行ひ悪くバ幾〳〵とやゝ〳〵のふ諫爭べ〳〵方一父母の心志從ゝるを見付ちバ早速にとりなを〳〵のりにその心に不違て恭敬〳〵く苦勞を致まべゝなりゝ〳〵や却て怨に逢て苦むとも怨る事ハ露ちども思ふべからざるゝ子ゝるの道なり

○子曰父母在不遠遊遊必有方

三年父之道ヨ改むる
と無孝と謂可

父母之年ハ知不バある可〳〵不一ハ則ハ
ち以て喜一ハ則ハち
以て懼る

古者言を出さ不ハ躬
の逮バ不を耻て也

約を以て之を失ふ
者鮮〳〵

父母をもの〳〵身ハ世ヨ在とき ハ父母の心を安堵ちさせのむるを第一とす
世を去すふとも己が心のまゝを妄ヨ行べからず理ち〳〵父母在とき ハ遠方の所へ〳〵
ざりは遊留ちまん〳〵ばたと〳〵遊居とも必ず方角を
定て告知らせその所をたゞのくぎバあるのるんきなり

○子曰。三年無改於父之道可謂孝矣。此章ちん〳〵

○子曰。父母之年不可不知也一則以喜。一則
以懼。バよりて我父母の年の しく〳〵ふ数を不知ものあり不持の至なり子
たる者ハ父母の年を知て不可不ゝなり孝行とふものハ父母の世ヨ在ふ
付てハ一ツの喜と一ツの懼あるべ〳〵たゝんバ年六旬の父母をもの〳〵あ〳〵ん ヨ諸
某ハ父母已ヨ過さり我ハ今るを事孝ちる誠ヨ仕合なる事なりと喜びまる年老さ
る事なきバ死〳〵もむ時節もやや近と懼べき事なり〳〵ぎや然るにうの〳〵
と父母の年をも不知ものあり沙汰の限なり

○子曰。古者言之不出。恥躬之不逮也
古者の人ハ妄に口ヨ善悪是非の事を言出さゞ〳〵とゝしのぼとい
へバ吾躬の行ひ口をもヨ逮ぶゝを耻て〳〵く思ひ ゆ〳〵なりとぞ

○子曰。以約失之者鮮矣。約ハ倹ぢややのと訓て謹〳〵てものく
めなる事なり言ても躬行ちゝひ

君子ハ言ふ訥〳〵て
行ひヨ敏を欲し

德孤なゝ不必ず鄰有

子游曰く君に事て數
さきバ斯に辱めらる
朋友ふ數きれバ斯に
疏る

ふん慎て約やのなる者ハ りそめ
ふも道をとり失なふとハ鮮矣なり

○子曰。君子欲訥於言而敏於行。訥とハたゞのぶるを
上ふの君子ハ德を尚て實
なる行を尚とな〳〵 依て言語弁舌ハ ゆゝの行事ハえげ〳〵て敏のな
るべきを忘ひ欲もその仰なり言行ひの表裏ある ハ人の耻べきとなゝぞや

○子曰。德不孤必有鄰。德ある者ハ必ず人親ミ懐きて交の人出来
右左その隣の家居の増の如〳〵 バ
なゝをたとん バ家一間出来なきバ
ものなり德なる者ハけつ〳〵て孤立ヨハ

○子游曰。事君數斯辱矣。朋友數斯疏矣。子游の仰セふ九そ
主君ヨ事る者ハ君り〳〵國家の大事ふか〳〵りる事あ〳〵ハ
と諫言をしまん〳〵 埒もなきとを數々申のある時ハ却て耻辱をとるものなり
まるふ事なれど朋友の道も義を以て交ゝとば互ヨ信實を尽くそん〳〵 然とも事
あげく言語ヨ出バ却て疎るゝものなり凡て諫るとハそのしまゞ崩んとをる所の塲
をえんをんう〳〵事成てハ益もくちる況ものなり○三るひ諫て君用さをバ官禄を辞
退〳〵て立去るとあり是ハ治世無事なる時なり〳〵 君の大事ふ及なんとをる時ハ
身命を社をつへきなり又侯人あり て上を暗と況ハ私の意趣ヨ託〳〵て生命をとろ
果てとのるん〳〵忠のいとりなり 天朝の明道ゆゝの如き事古来より〳〵てあるとと

公冶長第五

子公冶長を謂ハく妻を可なり縲絏之中に在と雖とも其罪に非ざと其子を以て之に妻せ

子南容を謂ハく邦道有に廢られ不邦道無に刑戮に免るゝ其兄之子を以て之に妻せ

子子賤を謂ハく君子なる哉若のごとき人魯に無ば斯焉んぞ斯を取ん

以中華といへども誠忠の士ハ異なる事をくなゝ

公冶長第五

子謂公冶長可妻也雖在縲絏之中非其罪也以其子妻之

御門人公冶長へ御息女を遣さんとの思めしをもて其爲人の取べきを論しのゝ公冶長ハ一さゝひ公遣へとらハを就しゝ人なり因て縲絏の中に在とハいゝ然とも無失の罪にて道なゝぬ罪ゝハあゝぞこの故に可妻と仰らる聖人の人を見只其義にあくまや否を考てその身の幸不幸を問ふ事なゝ

子謂南容邦有道不廢邦無道免於刑戮以其兄之子妻之

御門人南容ハよく世に用らるゝ人なり邦よく治まりて道ある時代にハ必ず上へ引挙用ひらるゝ者なり是全く心の決断もやさと言と行事を謹むめふかきゆへなり即ハち御兄之孫子を妻となゝめり

子謂子賤君子哉若人魯無君子者斯焉取

御門人宓子賤ハ本より賢を敬ひ德を好む誠に君子なる哉と称めもむ又魯の國賢人多きを称美しのふたとひ子賤に德ありとも魯に見習べき君子者なくバ斯人焉ぞ斯德を取得んやとなり

子貢問曰賜也何如子曰女器也曰何器也曰瑚璉也

子貢自已の氣量を何如なる位なりやと問奉まつる御答に女ハ器のなりと子貢安のごとき思ひて重ねて問奉まつるに器とハ何の器といふべきやと重ての御答に器なゝバ瑚璉なゝんぞ器なれども並くなゝなりとぞ

瑚璉

子貢問て曰く賜ハ如何子曰なハく女ハ器なり曰何の器なるのぞ曰なハく瑚璉也

或ひと曰く雍ハ仁にして佞なら不子曰なハく焉んぞ佞を用ん人に禦るに口給を以て屢人に憎まる其仁を知不焉んぞ佞を用ん

○或曰雍也仁而不佞

雍ハ仲弓の名なり顔淵に次ぐての御門人なり常に言もくなく行ひ慎ゝ重く威ありて本心の德を存つ然るに當時ハさいのく佞口あるを賢者といひふゝもゆん或ひとその德をゆめて才知なきやと問

子曰焉用佞禦人以口給屢憎於人不知其仁焉用佞

聖人の御答に德ある者ハ焉ぞ佞口言ハ多を用んや或ハ應答に口給をたのみ用て不足なる処を禦しゝ屢ぞ人に憎るゝりのなり佞口ハ君子のりやゝむ処なり仁の大道ハ仲弓にありやをゝひぞ焉ぞ佞と用の理をゝ

子漆雕開を仕へ使對て曰く吾斯之を未だ信ずる能ハ未子説ふ

子曰まハく道行ハれず不桴に乗て海に浮ん我に従ふ者ハ其由與子路之を聞て喜ぶ子曰まハく由ハ勇を好むと我に過ること無し（十）

○子使漆雕開仕へ對て曰吾斯之未能信子説

御門人漆雕開ハ信に厚く身を行を務る人なり聖人の思ひ〳〵ふかきや官位に仕て政道をも取さ〳〵と計なふ者なるに漆雕開ハ〳〵奉ずるハ吾いまだ聖人の御教へ〳〵心に信と得たるハ然ハなと学べ〳〵て仕へ〳〵ものとなり聖人てきを聞セるひ説びのもと限る〳〵学問に意を用の深きを〳〵

○子曰道不行乘桴浮于海從我者其由與子路聞之喜子曰由也好勇過我無所取材

此時世衰へ正き道に向りの寡く聖人之を嘆ひ道も行ハれと不見ざるいざや桴に乗て海上に浮も此土を去て外國へ行んのとなりさて有やうに諸國遊行セバその時こそ我に従てうきもたの〳〵きもの者ハ子路なるんとそ仰セらるるもの勇猛正實の人なるハ子路之を承りて喜びの色あるハ〳〵行て勇進に過る者ハ外を輕しめ多く道と害となり是を以て聖人まだ禁めるやハ由ハ勇を好むと我よりも過るかく一事をなるや否進ハたける者ハ材知の取材ところなき者なり

とそ由ハ子路の名な

○孟武伯問子路仁乎子曰不知也

仁ハ心の德愛の理天下に及ぶを大道

孟武伯問子路仁なり乎子曰まハく知不

又問子曰まハく由ハ千乘之國其賦を治め使可なり其仁を知不

求ハ何如子曰まハく求ハ千室之邑百乘之家之ゲ宰となら使可なり其仁を知不

赤ハ何如子曰ハく赤ハ束帯して朝に立ハ賓客與言ハ使可なり其仁を知不

子子貢に謂て曰まハく女と回與孰ら愈ると對て曰く賜ハ何そ敢

としふたとんハ賢なりとりへども中〳〵子路の場所にあ〳〵を或ひと子路ハ仁者ならやと問奉る右の故を以て不知と答へ〳〵となり

又問子曰由也千乘之國可使治其賦也不知其仁也

ある人まく推〳〵如何なる位の人ならやと問聖人答へ〳〵由ハ氣量ハ凡千乘之國の人民を治ハ心安〳〵んなるべ〳〵賦ハ人數とくハると訓て車一乘に人數何ほど〳〵領分ふまり付るとなり

求也何如子曰求也千室之邑百乘之家可使爲之宰也不知其仁也

又御門人冉求ハ何如なる人や御答求ハ千室むらりの邑乃至車百乘をも出をそのりの國なるハそのの政道を司とる位の宰とハなるべきなり然ともその仁の道を得と者ハ不知処なり

赤也何如子曰赤也束帯立於朝可使與賓客言也不知其仁也

又公西赤ゲ人柄を問御答赤ゲ人柄ハ束帯冠なと〳〵て御殿朝に立出て諸方の賓客使者等に出合言語應對ならるべ〳〵となり

○子謂子貢曰女與回也孰愈對曰賜也何敢

て問を望んと問ハ一を聞て以て十を知賜ハ一を聞て以て二を知

子曰まハく如弗なり吾女の如弗を與を

宰予晝寢ゝり子曰まハく朽ゝる木ハ雕可からず糞土之牆ハ朽可からず不予に於て與何ぞ誅んや

論語

望回也聞一以知十賜也聞一以知二御門人の中子貢の常ゝ人の智と自己とを方ゝるとを好ゝり聖人謂ハ女と顏淵とハ孰か才智愈と思ひや子貢對て曰く本より顏淵ハ及バぞ顏回と高下を望と吏ゝなゝ顏回ハ万事の理其一の端を聞やり多末の十を悟るなり吾ハ一を聞て其二を知るとぞ賜ハ子貢の名なり回ハ顏淵の名なりかく古の学者ハ自己氣量をはかり知りて及さるを及バぞと知る後世ゝゝなりゝ子曰弗如也吾與女弗如也己を考る者と同なりぞ

子貢ハよく自身の量を知り又よく顏淵ハ如弗也吾も甚称義ゝて女の顏淵ハ如弗いふさんなりと称義ゝ

○宰予晝寢子曰朽木不可雕也糞土之牆不可朽也於予與何誅宰予ハ御門人宰我なり聖人の御徳光を知ゝ晝寢ゝゝ晝寢ゝゝハ聖人あれを考るのぞゝゝ最も時ふよりて晝寢せまゝゝあゝ○ども宰我つゝよ弁舌に任て礼義忠信をいひ人を服セゝゝめ知て自の行を厲ぎ凡て物に怠るものハたとんバ朽木の雕なゝぞ糞土にある墻屏ハ壁腐て朽べからぞ真に宰予に於てハ誅ふもなゝゝとれかくのぞゝ宰予ハ

子曰まハく始め吾人に於る其言を聽て而ゝて其行なひを信ぞ今吾人に於る其言を聽て而ゝて其行を觀ん予に於與是を改む

吾未ぞ剛者を見未或ひと對て曰く申棖子曰まハく棖ハ慾なり焉ぞ剛を得ん

（未）二度よむなり

子貢曰く我人之諸を我に加るを欲セ不吾も亦諸を人に加ると

子曰始吾於人也聽其言而信其行今吾於人也聽其言而觀其行於予與改是右御あうりの跡ゝく吾娘より人と交接に於ていつも其人の言を聽てゝゝ正直道ぞゝての事をいふ人なをバ定て其行もさうんと信向に思ひゝゝゝゝ今宰我ぞゝく行を違ふあるに於てハ今より改めく其言を聽もゝゝ其行をもとくと觀て承知ゝゝ宰予ゲ事に於て始て是ハ改とん

○子曰吾未見剛者或對曰申棖子曰棖也慾焉得剛剛ハてづゝとよゝゝて操行正ゝく志ざゝゝとくづるぬとるくたをなるぞるなり夫ゆへ聖人も右剛者の人柄ハ未見ぞと好よゝゝく思ひわふある人るゝてゝゝや御門人申棖てそ剛者といふものなゝんゝ聖人御眷申棖ハ慾といふものなり焉に剛とりふとを得んや慾とハてゝろゝ好むとるくたとんバ人に誉らるんと夫ようて善行をなるなり必ぞゝゝかくく守る事あくハぞ

○子貢曰我不欲人之加諸我也吾亦欲無加諸人子曰賜也非爾所及也此段子貢仁の工夫ありて凡そ人より我身に加ふくる事のこゝろ

無らんと欲せ子曰
まハく賜再の及所ま
非ず

子貢曰く夫子之文章
ハ得て聞可夫子之性
と天道與を言まゝハ
得て聞可からず

子路聞あと有て未之
を能行ハ未唯聞を有
と恐る

子貢問て曰く孔文子
何を以て之を文と謂
子曰まハく敏にして
て学を好み下問を恥
不是を以て之を文と
謂

子子産を謂ハく君子
之道四有其已を行な
ふ恭なり其上ま事る
敬なり其民を養恵
なり其民を使義なり

晏平仲善人與交ハる
久くして之を敬ま

ま不欲と思ふとハ吾よりも人へ加らくる事の無んと存ずるよりのべてハ聖人
仰ま之れハ汝の及ところまハあらずと云ふ中庸の書みゝるハ我身分をそ
ま逢ふる事ま是ハいやなると思ふとハ必ず人へその事を及さぬよふにせんとあ
り是ハ恕とて我身を以て人へもおよぼさゝり此ま云ハいまゞ我身ふあハざる事を
廣く推及ぼして愛せるなをバ仁の道と
いふものまく子貢の及ぶ所まハあらず

○子貢曰。夫子之文章可得而聞也夫子之言
性與天道不可得而聞也子貢の平生見受奉るを述るなり夫
子の身に行ひぬふ処ま御徳の文
章処ハ人〳〵ま見聞奉まつりまく性天道の二ツを言とハ妄ま聞得不可とな
性と人の生るゝ始より受〳〵る天の理の定まりあるなり天道とハ自然と天の運數
あるて人の自由をべのぬ事あるあの事ハ知者もまゝまま
知て口小説ぶるく常の人ハ之を聞て惑を生ずるゆへなり

○子路有聞未之能行唯恐有聞御門人子路ハ義理を尊
び行ひま進まるふ故御
御〳〵をうけぬハりて未ざその事をとくせざる内ま又其上ま
聞と有のと恐ひぬひ〳〵とな

○子貢問曰。孔文子何以謂之文也子曰。敏而
好學不恥下問是以謂之文也此段衛の國ま孔圉といへる
人より尊て孔文
子といわ文といふ字古より德ある人ま名付るなり聖帝とあめ〳〵文王の文ハ天
地と文を平との心なり今孔圉ハ行ひ醜と多〳〵然るに何の以ふり之を文とハ謂つ
らんやとの問なり御答文子が爲人常ま空く日を送ぶ古人の事を敏く学ひその上
下問を恥ら〳〵く思ハ不となり下問とハ吾より位賤く下なる者まとハ吾より年の
下なる者ま愧ぢ〳〵て紛ぬとバ問たづぬる
とこ是訳を以てこそ之を文とハ誉〳〵となり

○子謂子産有君子之道四焉其行己也恭其
事上也敬其養民也惠其使民也義子産ハ鄭の國の大
夫なりまの人君子
の道四品有一ふハ已身の行つとまま恭ふらく二ツまハ君ふ對〳〵てハ敬のまゝ自
ふ〳〵容貌まあ〳〵ハまと〳〵となり三ふハ下民を惠と常ま心にうけ〳〵四まハ下ぐ
を使むといふも義
きに叶ひ〳〵となり

○子曰。晏平仲善與人交久而敬之晏平仲ハ序ふ出と
る晏嬰の事なり此人善人の交をなせ〳〵人なりと聖人わめるひ〳〵おの人常ま人
と交接ま馴く布るゝ〳〵久〳〵さふまゝ敬ひ敬まて

子曰はく臧文仲蔡を居に節と山ふ棁ふ藻何如ぞ其知らん

子張問て曰く令尹子文三たび仕て令尹と爲て喜色無し三たび之を已るに慍色無し舊令尹之政ど必ず以て新令尹に告何如子曰はく忠なり曰く仁矣乎曰はく未ど知未焉んぞ仁を得ん

礼義あり〳〵とあや今の風俗と違て心得べき事なり

○子曰臧文仲居蔡山節藻棁何如其知

兎かく世上うハ氣ふんやり易く魯の臧文仲と叡中知者なりとしひ〳〵せ〳〵なり聖人元より人の善を誉めひて人の悪を謗めよ〳〵さものと常に人へ示し〳〵るふやどこ然ども行く〳〵さ人を智者なりと得ぜ〳〵て批判をな〳〵ぬかさて中華ふてハ諸侯〳〵ト占の亀を貯へ置若一大事決し〳〵のこさと紀ハ其甲をとりて焼其上に彰る〳〵紋を見て占なひ定むるあとなうあるに文仲ハ大夫の身と〳〵て此礼を用ひま〳〵亀を入置節にハ奢をきハめ山水など彫物して棁にハか〳〵草あるひ藻草を摸様ど〳〵〳〵かく身の分限をあ〳〵で上ど恐ざる人を何如ぞ智者といめ可や○蔡ハ亀トれうめの出る処ゑ

○子張問曰令尹子文三仕爲令尹無喜色三已之無慍色舊令尹之政必以告新令尹何如子曰忠矣曰仁矣乎曰未知焉得仁

此段子張の問なり令尹といめ官名ハ楚の國にかざりて大夫の事なり楚の子文ハ三たび令尹の官ふめ〳〵出さを〳〵ゑに見ハをびゑ〳〵兼ぐ三度まて官を已て召あげらるれども餘人の如く喜の色目に見ハをびゑ〳〵

を〳〵ろとも怨慍ゑる色なこの〳〵なり右很義引たび毎に自身ハ令尹の舊なをバ其政方等の格を以て新役の令尹へ細に告教〳〵より〳〵此如の人ハ何なる人と誉べきやゑ御昔かく自身の事ハ利不利のうまひなく只君の事のみふ心を用るハ忠矣臣といめ〳〵子張ゑ〳〵曰く我身の利をもつ〳〵仁者と申さんハいかゞ聖人仰セふハ仁ハ万民を愛そるの道中く小さゑ事を得んや

崔子弑齊君陳文子有馬十乘棄而違之至於他邦則曰猶吾大夫崔子也違之之一邦則又曰猶吾大夫崔子也違之何如子曰清矣曰仁矣乎曰未知焉得仁

崔子ハ齊の大夫なり齊の君元より不德なるに崔子ゑ〳〵無道人なりある日齊の君崔子が夫人に不義をな〳〵つゑに崔子が爲に殺さをゆひ〳〵陳文子もま〳〵大夫なり文子此有さまを見て餘に見苦く汚らハ〳〵くゆゑて馬十乘やど持る家なをども官録をさ〳〵上て齊の國を立さり他國へ至て〳〵に兼て名のある文子ゆへ重く抱らを〳〵が不仕合なる人ゑ〳〵まを〳〵吾國の崔子が猶ゑあり凡るかを小違てまを〳〵官録を捨て立さり一邦に至て〳〵ゑまを〳〵く同〳〵やうゑあり凡る以上三度おち〳〵挙動となせ〳〵此の爲人ハ如何となり御昔ゑ〳〵やうゑ官禄を寶ともせて欲なをハ清矣人なり〳〵とぞまを〳〵問て曰く仁なり〳〵や昔て曰はく臣と〳〵て仇を報ぜざ

季文子三〻び思て而〻て後に行ふ子之を聞て曰ハく再び斯可矣

甯武子邦道有バ則ハ知なり邦道無バ則ハ愚なり其知ハ及可なり其愚ハ及可ら不也

子陳に在て曰ハく歸與歸與吾黨之小子狂簡斐然と簡に〻て斐然と

る段ハ未知焉り仁の名を得んや○吾より目らに人を害

なる ハ藏といひ吾より下なる者を殺とハいふなり

○季文子三思而後行子聞之曰再斯可矣

季文子ハ魯の大夫なり生付と〻て何事ゝも疑をいだき幾度も思ひうへも人柄に

くあり〻て物に ぬんを入るゝハよ紀事るくも〻め心に浮〻ばのりるく、條

暗なり二度思ひうへもハ念入てよろ〻三〻びハ疑てあ〻さなり季文

子の行ひを聞め〻きひて物の理ハ再びうく可〻〻んと仰られ〻

○子曰甯武子邦有道則知邦無道則愚其知

可及也其愚不可及也衛の大夫甯武子を称ぬひてよく世の風を

悟て身を苦労の場に置ざる人なりとそを

邦明のふ道有バ知者賢人ハ用ひらるゝ邦に道無時ハ知ある者ハ悪まるゝ

とふて却愚なる者ハ身に害なゝ然に甯武子ハ智を自由ふ用ひ〻人なり邦に道

ある時ハ智者なりと用ひらを邦に道なき時ハ愚なりと人に見られ〻よ〻

聖人も仰あり て寧武子愚なる場所に ハ及バぬとなりと誉めひ〻

○子在陳曰歸與歸與吾黨之小子狂簡斐然成章不知所以裁之此義ハ聖人諸國へ御周流あり て此時陳の國に

在〻ひ故郷に帰んとぬ〻め〻ての語

〻て章を成之を裁

る所以を知不

伯夷叔齊ハ舊悪を

念ハ不怨是を用て希

なり

孰か微生高を直なり

と謂或ひと醯を乞諸

と其鄰に乞て而〻

て之を與諸而焉

巧言令色足恭なるハ

左丘明之を恥丘も亦

之を恥怨と匿而〻

なり〻ふ〻〻び帰與を帰與をとのゝ子細ハ吾小子の黨なりて学問に進〻志ざ

大なり〻〻者ハ定めて狂簡て社あり〻ん多くハ斐然に文章風流のゝを成て礼楽学

術の裁をる所以を知ざる

なり〻んと仰せらを〻

○子曰伯夷叔齊不念舊悪怨是用希

伯夷と叔齊とハ兄弟にて徳高く孤竹城の君の子なりその人柄とて〻て舊に あり

〻人の悪事ハ一念に掛ると更になりり〻是用に人に怨をうくるとハ希なり

○子曰孰謂微生高直或乞醯焉乞諸其鄰而

與之微正高を正直なりとのふる者もあり〻うの事ハ大事にて〻

名を挙ゝる者一〻び道をう〻なんバ外大道の害となるゆへ己とを得ぞ

〻て詳のふ弁〻なり先達て或人醯を乞に来る折〻内に無ハ無とバ竊に其鄰

へ行て乞来りをを與て吾内にあり〻ゆうふその礼を受〻となり正直といふ

ものハ理ハ理非ハ非とりひ有ハ有無ハ無といふの正直なり聖人其一介の場所に

氣を付て其善悪を見なゝ人に謹といふ事を重をべ〻との所以を示のふ

○子曰巧言令色足恭左丘明恥之丘亦恥之匿怨而友其人左丘明恥之丘亦恥之言を巧ふ

て諂ひ顔色を

て其人を友とし左丘明之を恥丘も亦之を恥

顔淵季路侍子曰まハく盍各爾ゝ志を言盍

(盍)二友子路曰く願くハ車馬輕裘と衣朋友と共に〳〵之を敝て憾無けん

顔淵の曰く願くハ善に伐と無く〳〵ん労と施とと無らん

子路曰く願くハ子之志ざ〳〵と聞

子曰まハく老者ハ之を安〳〵朋友ハ之を信〳〵少者ハ之と懷ん

合て敬恭の足るハ甚しくるゝ者なりと左丘明といふ人恥さとに思ひ〳〵我もやゝ同やうふ恥とせるなりこゝろの内ゝ悪ゝ嫌て上向ばのゝふ交接陰るゝかを是といふ事も左丘明ゝ恥とせ〳〵由我もやゝ同やうなりと聖人自〳〵のゝひ〳〵

○顔淵季路侍子曰盍各言爾志

顔淵と季路と御傍ゝ在せ〳〵小聖人仰あり て盍なり共各の再志〳〵子路曰願車馬衣輕裘與朋友共敝之而無憾

子路の御爲人喜と好ゝ義理ゝ是方なり凡とへハ車馬元ゝ貴賤ゝ敝ゝ衣類等の物なり〳〵て吾物と思ゝ〳〵て或ハ之を敝ゝ又ハ〳〵なひるゝ〳〵ても少〳〵も憾ゝ氣ゝのくるゝとハ有ま〳〵とそ

顔淵曰願無伐善無施勞

顔淵自已の願ゝハ吾たとへいのゝ夫を伐心なるゝとのなきやうふと少〳〵も伐ぬを第一とへまゝ人のこゝろゝ是ハ心労なりと思ふやうなるゝとハなれやうよい〳〵度況や不仁ゝおゝ〳〵さとハ露ゝ子路曰願聞子之志

右各自已の見識をのゝ終て

ども人ゝ施ゝ〳〵さんとそ

扨聖人の御心〳〵承ゝ〳〵んとの子路の問なり

子曰老者安之朋友信之少者懷之

聖人の意思ゝハ吾常ゝ天下の老て衰ゝ者をハ少〳〵まく〳〵苦労のなゝき事の無やうふあり〳〵とのゝ心なるゝゆゝ平生付合老人ゝハいつも吾ゝ安心せるゝやうと交るゝまゝ廣き朋友ゝハ約束違ゝ實なるゝとを以て先より吾ゝ信を以て交るゝやうふあり〳〵きなり又常ゝ天下の万民を按安〳〵〳〵きゝろを抱くまゝの故ゝ平生年少き者と愛〳〵吾〳〵もまゝよく懷さ相親むとゝ初のゝふとなり程子先生の仰ゝ聖人の心ハ天地の万物を生育のゝ氣象なりと説めひ〳〵

○子曰已矣乎吾未見能見其過而内自訟者也

此段の意ハくやうの人爲を遂ゝハ見ぎ〳〵て已矣乎やと恐きのふ子細ハ若身ゝ過なる事あるに吾と吾心の内ゝ其宜の〳〵不をよく見付心を留て自の〳〵心を訟て磨あ〳〵こもるこそたのゝ〳〵きゝ

○子曰十室之邑必有忠信如丘者焉不如丘之好學也

兎のくハ学問を好べき事ゝ道を学ベハ大德ゝも至ゝ〳〵ゝ我を生なゝ〳〵ゝ知るゝど〳〵しゝど中〳〵さふあ〳〵ぎたとへハ十室むのゝあるゝ小邑ゝも忠信なるゝと我にまゝ〳〵人も有べ〳〵我如く学んで倦ざるの学問を務るゝとハ如人あるゝ〳〵となり聖人も必ず学を好といふ事を示〳〵